

詩編 第126編 5～6節

「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。」

涙とともに働く、泣きながら畑に出て行く姿は、苦勞の尽きない人生を描いている。土地を耕し、種を蒔き、晴れの日もあれば悪天候の日もある。嵐のときもある。これら多くの出来事は農夫の手が届かないところで起こる。それでも最善を尽くし、忍耐し、汗を流しての勞苦が続く働きである。そのなかで、この歌い手はやがておとずれる収穫の季節をのぞみ、体験している。だから、どのような空の下でも地に種を蒔くことを止めない。

さらに、農夫の姿を見ると、手元には種を持っていることがわかる。勿論、手ぶらで種蒔きの季節に畑に出る者はいない。種を蒔く者、種入れをかかえ、とある。農夫の手元にはすでに喜びの種がある。収穫のときを迎える保証の種がある。希望の種がすでに農夫の手元にある。涙とともに、すでに喜びの種がある。泣きながら出て行く者の腕に喜びの種がある。涙のなかで喜びの種、収穫の種がある。涙も、種も、収穫も、喜びをもすべてご存じの、収穫の主イエス・キリストの下で出て行く者の手にはすでに喜び叫びの種が備えられている。だから、僕はどんな空の下、土地でも種を蒔く、福音の種を蒔く。